

実践事例：図書館活用の調査事例とIRの学内理解への展開

平成27年度第4回IR実務担当者連絡会
於：立命館大学いばらきキャンパス

白石哲也（清泉女子大学）
有田亜希子（清泉女子大学）



1. 学内のIRに関する理解

学内におけるIR理解の必要性

1) なぜ教職員のIRの理解を高める必要性があるのか

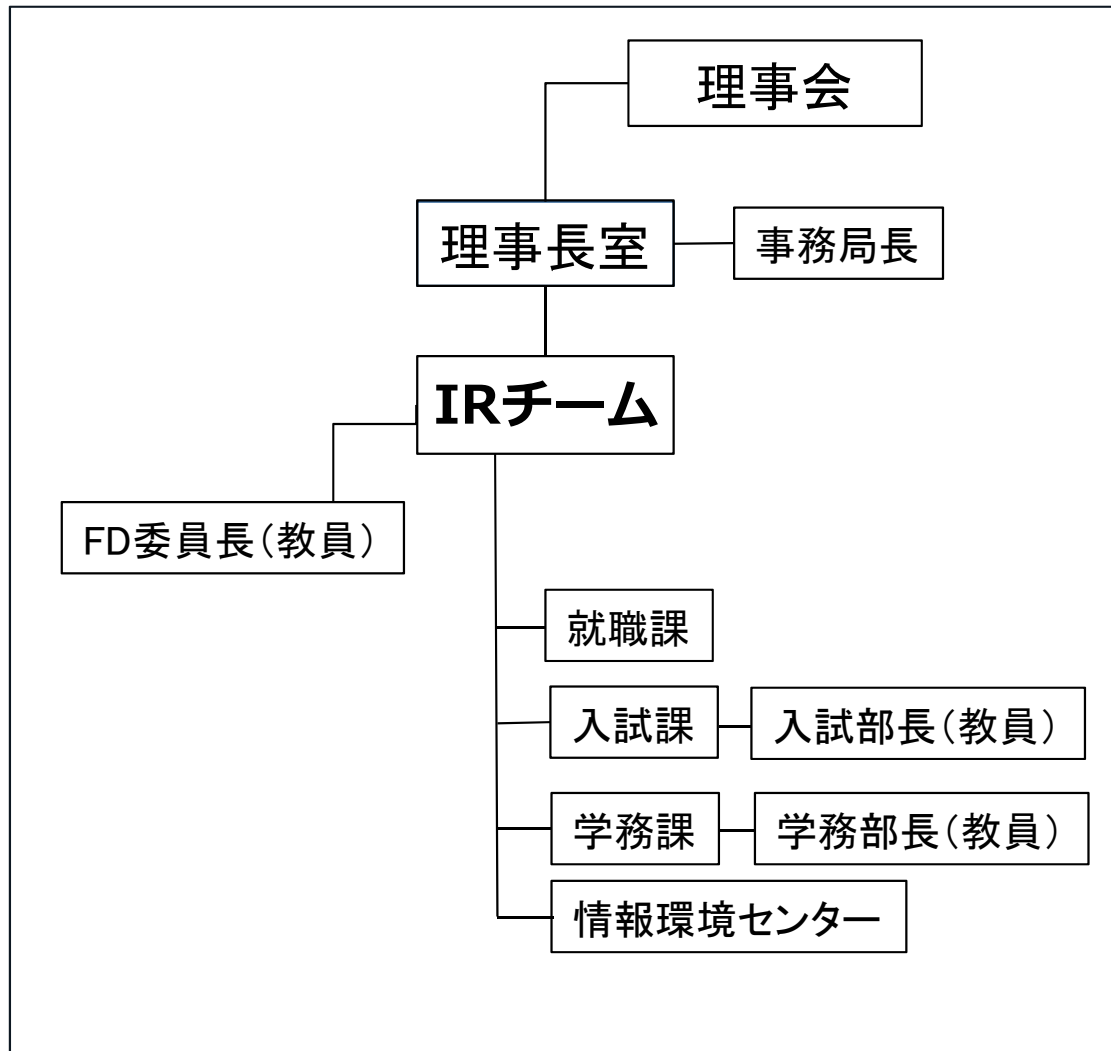
a) IR担当者

- データをストレスなく取得する環境構築（データカタログやDBが完成していない）
→基幹系システム以外にも多くのデータが存在する。より良い分析を行うためにも教職員の理解と協力が必要。

b) 教職員

- エビデンスに基づいた学内文化の構築

IR体制と導入過程



従来のIR体制

2) IRの導入過程

2013年

統合電算化運用支援チームの設置

- 学内に離散するデータ集積を目的として設置

2014年～2015年

IR推進チームの設置

- 教学体制の改善・強化のための情報収集、加工、分析を実施することを目的として設置
- 上記分析を通して、教授会、常務会への企画・立案、政策提言等の機能を担う
- 統合電算化運用支援チームを改組

IR認知度向上の徹底に向けて

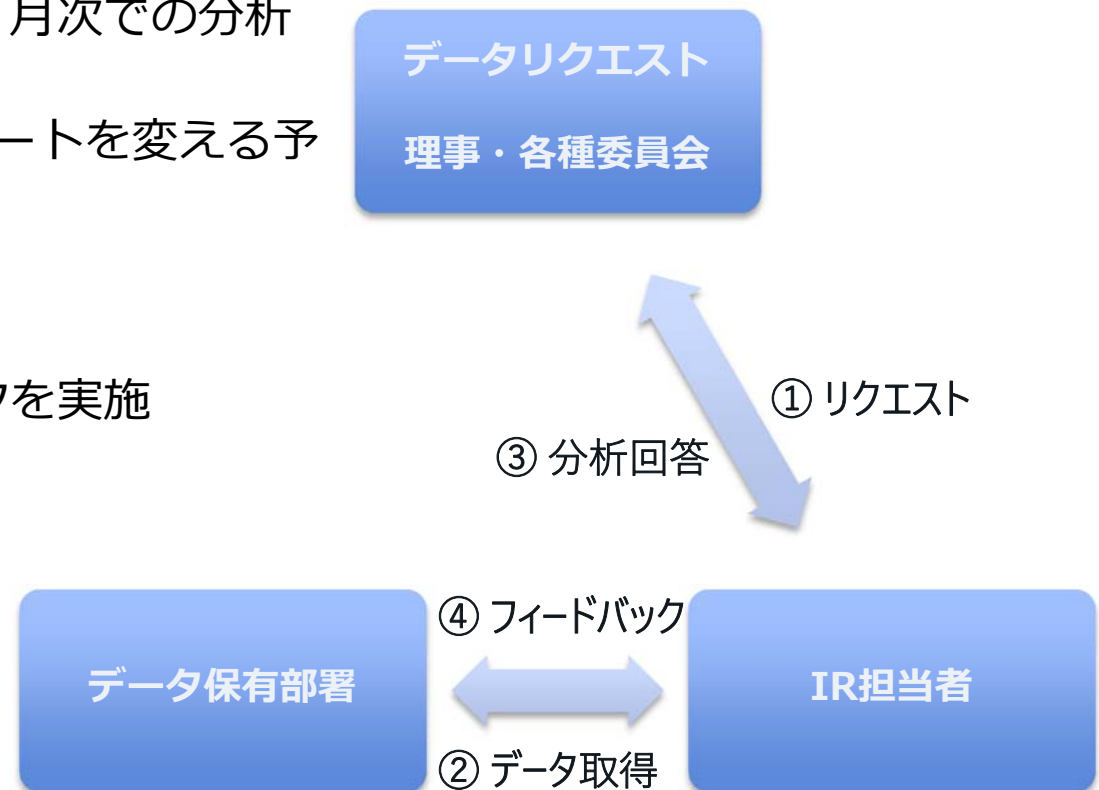
4) IR認知度を上げるための方策

a) 教職員への分析結果の開示（2016年度実施予定）

- 教員・職員の連絡系委員会において、月次での分析レポートのプレゼンを実施していく
→教員と職員で、若干提供する分析レポートを変える予定（興味・関心のあるものを提供する）

b) 各種委員会・部署・学科（実施中）

- 貰ったデータに対するフィードバックを実施



学内認知と問題

3) IRの学内認知

a) 教職員

- 学内での文書等で、IRチームという組織があるのは知っている
- 実際に、どのような活動を行っているのか不明

b) チームの構成員

- 隔週の打ち合わせなどを実施→「活動をやっている」という意識はあった

(問題点)

2. 図書館入退館データの活用

図書館のデータ分析以後

5) データのフィードバックを行った結果

a) 教員の反応

- 学生指導の変化
- データを可視化したことによる楽しさ

b) 職員の反応

- 図書館利用時間別の対応検討に入る
- 図書館利用者を増やすための新たな分析依頼（共同実施）

当然ではあるが、教員と職員の興味・関心は異なる。そのため、それぞれを惹きつけるための分析を行うことで、IRを学内に浸透させていくことを意識して活動を実施